
『世界一優しい殺し屋』と『踊る世界』

三時一分六秒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『世界一優しい殺し屋』と『踊る世界』

【Nコード】

N5960X

【作者名】

三時一分六秒

【あらすじ】

殺し屋が暗躍する時代——父親への殺意を募らせる少女「千夏」とそんな千夏を殺し屋から護る少年「春都」は仮初の平穏を過ごしていた。

二人の前に『世界一優しい殺し屋』が姿を現すとき、千夏と春都の世界は大きく変化していく。

異世界ものではないちょっと未来の日本の話です。主人公が地味

に最強なのとそんなに残酷で暗い話でもないことが特徴です

ブローグ 〰 優鬼 〰 (前書き)

誤字・脱字などあつたらすみません

プロローグ く優鬼く

優鬼 プロローグ

「——以上が今回の依頼の内容でございます。質問はございますか？」

場所はとある高級ホテルの一室。黒いスーツを着た初老の男性と黒ずくめの男が向かい合って座っている。初老の男性は白髪交じりの髪をオールバックにし、スーツにも皺一つ見て取れない。それはまさしく執事といった出で立ちであった。柔和な人相の中に何か常人とは違った雰囲気が見え隠れしているようにも見える。対して向かい合う男は黒い外套を着込み、鼻から下を黒い布で覆っている。布に隠れていない瞳からは強い意志の光が見え、発する気配からは尋常ではないものが感じられる。その様子はさしずめ狩人、といったところか。

執事風の男性の問いかけに対して男が口を開く。

「一ついいだろうか？」

「ええ。なんなりと。」

「まず……、その依頼の内容と報酬は正しい情報なのか？」

男は油断なく執事の男性を見ながら話を進める。

「はい、正確な情報でございます？何か不適切な部分でも？」

「ああ。報酬と達成条件のつり合いが取れていないのが少し気になつてな。」

ああ、なるほど——といった風に執事の男性は頷く。

「しかし、事実でございます。私達の主——つまりはあなた様の依頼主の方がそう申しております。間違いである可能性は限りなく低いと思いますが確認させていただきます。」

「依頼内容は『九龍^{くりゅう} 千夏^{ちなつ}という少女の殺害』。達成時報酬は『二億円。依頼に従事している間は、月に五十万円が支払われる』。なお、他の依頼との兼務も可能です。」

男には理解しがたい内容だった。たった一人の少女を殺すにしては動く金が大きすぎる。それに、報酬の内容を見るに、長期的な依頼従事を望んでいるようにしか思えないところも気になる。

男は殺し屋だ。殺し屋が人を殺すのは当然のこと。それが、勘当された大財閥社長の娘でも変わらない。だが――

「俺はフリーの殺し屋だ。後ろ盾となる組織はない。そんな奴に本当に二億円も払って人を殺させるのか？」

この依頼からはたえようもない不安と危険の匂いを感じる。それが依頼を受けさせることをためらわせる。

「はい。」

「……………」

男は思考する。この依頼を受けることで発生するメリットとデメリットを。

メリットは『二億円』という破格の報酬。

デメリットはこの依頼が不自然なものすぎてイレギュラーな事態に巻き込まれる可能性があること。

男はそれほど食うのに困っているわけでもない。むしろ、フリー

の殺し屋としてはいい暮らしをしているほうだ。そこから導きされる答えは――

「悪いが、今回の依頼はお断りさせていただきます。」

男ははっきりとそう言った。

しかし、執事の男性の表情は変わらない。まるで、そうなることが分かっていたかのようにだ。

「なぜですか？」

執事の男性が静かに問う。

「『なぜ？』だと？あなたには分かっているんだろう？十人も殺してないようなヒヨっ子ならまだしも、俺はそれなりに経験を積んできている。ある程度、この業界に身を置いていれば今回の依頼がおかしいことになんてすぐ気づく。」

それだけ言うと、男は出口の扉に向かう。

「お待ちください。」

「ん？」

執事の男性は男を制止すると、携帯で誰かに連絡を شدした。

『――なんだ？』

四コールほどしただろうか、執事の男性も持つ携帯から男の声と

思しきものが聞こえてきた。

どうやら相手は今回の依頼主らしい。

「はい。それが少々困ったことになりました。」

『……断られたか？』

「はい。」

『まあいい。想定内のことだ。代われるか？』

「はい、ただいま。」

執事の男性が携帯を男に渡す。

「私が今回の依頼をした者だ。名前は諸々の事情で伏せさせてもらうよ。」

聞こえてきたのは力強い——おそらくは四十歳台くらいの声。自信に満ち溢れ、揺るがない信念を持つことをうかがわせるその声は男の警戒心を煽るのには十分だった。

（これは予想外の大物か？）

「……あなたが俺にあんな変な依頼をしたのか？」

「そのとおり。私が君に変な依頼をしたのだよ。」

そついうと依頼主はクククと喉を鳴らして笑った。

「どうかしたのか？」

「クク……失礼。まさか私も君にそんなことを言われるとは思わなかったよ。」

「どういう意味だ？」

「言葉どおりの意味さ。君ほど変な殺し屋はいないだろう？君と比

べたら私の依頼などまともな部類だよ。」

男は当てはまる部分でもあったのか素直に認める。

「確かにそうだな。だが、今回の依頼は受けられない。俺もまだ死にたくないんでな。」

「ほう、死にたくない？君はこの依頼がそんな危険なものに思えるのかね？」

「そう思ったから辞退させてもらっただ。」

（なるほど。変人扱いされてはいるが、やはりトップレベルの者だな。）

依頼主は電話の向こうにいる殺し屋に感心していた。

「しかし、どうしたものかな。」

「どうしたもこうしたもない。俺はあなたの依頼を受けない。それで終わりだ。」

「それでは困るのだよ。私は君に教えたいことがあるのだからね。」
「……教えたいこと？」

——知りたくないかね？君のご両親を殺した者を。

不自然な間の後、男が声を絞り出す。

「……知って、いるのか？」

「ああ、もちろんだとも。そして、君の本名もね。」

「……………」

本名を知っている——その言葉で男は一気に冷静になった。
どこかの企業に属している者ならまだしも、フリーの殺し屋にと
って名前と顔を知られるのは死ぬことに等しい。もしも業界の人間
にばれたなら——

「俺は死ぬな。」

「心配しなくてもいい。私は現時点で君の名前を他の殺し屋に売る
つもりはないよ。」

それは言外に『依頼を受けなかったらどうなるか分かんがね。』
と言っているようなものだ。

「……俺に選択権はないわけか。」

男は諦めたように呟いた。

「さて、どうするのかね？」

男の様子に構わず依頼主は続ける。

「……いいだろう。その依頼、受けさせてもらう。」

「そうか。そういつてもらえると助かるところだ。」

依頼主は微笑を浮かべる。

「だが、さっき言ったことを忘れるなよ。」

「もちろんだとも。君のご両親を殺した人物のことは依頼を完遂し
た暁に話すでしょう。」

それから——と男が続ける。

「知っているとは思うが、俺は普通の殺し屋とは違う。依頼主とは
言えど、俺の任務態度に文句は言わせない。」

「それは分かっている。君が殺害対象ターゲットにすることぐらい知ってるさ。

」

「それは助かる。それでは失礼させてもらう。」

男は電話を切った。

「殺害対象ターゲットの願いを叶える殺し屋か……。なかなか面白いではない
か。」

電話が切れたことを告げる電子音を聞きながら、依頼主の男——
九龍 清治は微笑を浮かべていた。

二十一世紀後半——世界は大きく変わっていた。
利益を求めるために企業が協力し合う時代は去り、企業がお互いの
要人を殺すために殺し屋を所有する。新しい技術を生み出したも

のが勝つのではない。優秀な殺し屋を持つ企業が勝つのだ。

技術の進歩など見られない。あるのは技術を奪い合う醜い殺し合
い。

停滞した時代で一人の殺し屋の運命が動き出す。

名を優鬼——『世界一優しい殺し屋』の異名を持った最高峰の殺
し屋。

第一話（前書き）

誤字・脱字などあればご指摘をお願いします

第一話

第一話

午前四時半、まだ人々の意識が夢の世界にある時間——少年は目覚める。朝のあいさつを言うわけでも眠い目を擦るわけでもなく、少年はキビキビと布団を畳む。綺麗に畳まれた布団は押入れの中にしまわれる。

眠気覚ましなのだろうか、流し台に向かいコップ一杯分の水を飲む。コップを流しに置いたあとは洗面所で顔を洗って、歯を磨く。

洗面所の鏡に映った姿は、黒髪黒眼の典型的な日本人。百八十に届くか届かないかの身長は日本人の中では平均よりも少し高い程度であろう。顔は悪くない……が、髪が特に整えられてないのと表情に乏しいためあまり他人に魅力的には映らない。

少年は顔を洗い終わると、居間で黒色のジャージに着替え柔軟を始める。起床から柔軟までの行動を約五分で行う。

「今日も大変な一日になりそうだな……」

そう呟き、黙々と柔軟を続ける。

五分ほどそうしていただろうか、少年は柔軟をやめ立ち上がると玄関の扉をくぐり外に出た。

——少年が通った扉の横には『瀬川 春都』と書かれた表札が掛かっていた……。

春都が住んでいるのは家賃が安めな一人暮らし向けのアパート。

駅に近く、付近の中学、高校に近いので学生には助かる立地条件だ。しかし……現在ここに住んでいる人間は春都ともう一人の住人だけだ。安くて立地がいいのに入居者が増えない理由……それは――

「……いつになったら修繕するんだこのアパートは。」

春都はアパートを見ながら呟く。いまだき、ここまでばろい建物はない。ちよっと風の強い日にはアパート全体が揺れる、軋む、傾くのオンパレード。風呂は付いておらず、トイレも共同。風呂に関しては近くの銭湯を利用すればいいし、トイレも春都が毎日掃除しているため清潔だ。

「……もう少し、マシな物件にするべきだったな。」

またも呟く。本人は気づいてないようだが、彼は毎日そう言っている。

「そろそろ行くか」

左腕にした時計を確認すると時刻は午前四時四十五分を指し示していた。

「……五分も嘆いていたのか、俺は」

もう言うことはないのか、春都は日課のランニングを始めた。

春都のランニングコースの総距離は約十キロ。これを三十分ほどかけて走る。

春都のアパートを出発したあと道なりに進み、五分ほどかけて川に面したサイクリングロードに出る。ここを十分ほど走り、四本目の橋を渡る。そうして今度は行きとは反対側の道を通って戻ってくる。再び今度は別の橋を渡り、サイクリングロードを出る。そして行きと同じコースをたどってアパートの前に帰って来る。

それが、春都のランニングコースだ。
いつものコースを走りながら春都は思考する。

「しかし……もう一月が経ったんだな。」

春都がおかしな依頼を受けて一月が経つ。幸か不幸かこの一月変わったことは何もない。逆にそれが不気味であるのだが……。

「何も起きなければいいが……。」

口座を確認したところ月ごとに振り込まれる金はしっかりと振り込まれていた。

「まったく……なんで俺があんな女の護衛をしなければならないんだ。」

春都は今、ある少女の護衛をしている。その少女はある大企業の娘で、現在はとある事情で実家からは距離を置いている。

実家との関係が薄くなっている。そこは大企業社長の子女である。命の危険がある状況に陥る可能性もなくなはない。そんな少女を守るためにいるのが春都というわけだ。

春都がアパートの前に着くと、腕時計の針は六時十五分を指して

いた。

「今日もいつも通りだったな。」

表情に変化は見られないが、微妙に満足げな声音で言う。

「さっさと学校に行く準備をするか。」

春都は玄関をくぐり家に入る。

朝食を食べ学校に行く準備をする。時間的には全く急ぐ必要はないのだが春都はてきぱきとそれらをこなす。

結局、七時前にはすべて終わってしまった。始業は八時三十分で春都がいつも家を出る時間は七時半。つまり、後三十分ほど時間がある。

「……仕方ない。掃除でもするか。」

春都の住んでいるアパートは確かにぼろい……が、決して狭いわけではない。

六畳一間の部屋は一人暮らしの学生にとっては十分である。ただ、春都は自身の仕事の関係上どうしても荷物が多くなってしまう。結局は部屋の半分ほどが埋まってしまい、三畳分のスペースで生活している。

春都のする掃除は二種類ある。商売道具の手入れと生活空間の掃除である。

今日は時間があまりないため部屋の掃除のみをする。さっきもいったとおり、春都が生活に利用している空間は三畳ほどである。

一人で寝るなら十分、二人で寝るならぎりぎりと言ったところだろうか。商売道具を除けば、春都の私物は少ない。

毎朝のランニング用のジャージを一着、私服と制服が一着ずつ。服以外には洗面用具と下着ぐらいしかない。

ここでは、トイレだけでなく洗濯機も共同なのであまり大量には洗えないのだ。

「さて、掃くか。」

春都が畳の上を箒で掃く。掃除機なんてものはこの家にはない。掃除は全部アナログな道具で行う。お金がないのではなく、単に置く場所がないのだ。

慣れた手つきで掃き掃除をしていく。掃き掃除が終われば、壁を雑巾で拭く。最初に水拭きをしてそのあとに乾拭きをする。

こまめに掃除をしているためか春都の部屋の壁は綺麗だ。ところどころ汚れや傷が目立つが築四十年には見えないだろう。

最後に玄関を雑巾掛けして掃除は終了。時計を見ると、七時二十八分を指し示していた。

「ちょうどいいな。そろそろ行くか。」

雑巾と箒を片付けてから、通学用かばんを持って春都は家を出た。

春都の家から学校までは約二キロ——時間にして十五分ほどの距離だ。

家を出て左手に見える、傾斜のキツイ坂道を三百メートルほど登った後の十字路を右に曲がる。そのまま道なりに行けば春都の通う『私立修仁高校』に到着する。しかし——

「さすがに毎日毎日遠回りしているとめんどくさくもなってくるな。」

春都は最短距離であるはずのその道を通らない。家を出て左折す

ることなく、正面に見える道を進む。

五十メートルほど進めば大きく左にカーブしているその道を六百メートルほど進めば、春都の第一の目的地に着く。

第二話（前書き）

読まれた方からお褒めの言葉とご指摘の言葉の二つをいただきました。

ご指摘のほうは、話が淡々としているというものをもらいました。自分では必死で書いていたために、読む方の気持ちがかかっていなかったのかもしれない。

ご指摘ありがとうございます。

今回は会話も少し増えて、前よりは読みやすいかと思います。

第二話

第二話

ピンポン——軽快な電子音が響く。インターフォンの前に立つ少年——春都の表情は朝よりも幾分か硬い。それはこれからいっしょに登校する人間が原因だ。

星野 千夏——ほしの ちなつ九龍グループの子女であり、現在は勘当中の春都の護衛対象である。

千夏は時間に正確だ。必ず指定した時刻ぴったりに来る。その時刻よりも早かったり遅かったりする場合はほとんどない。しかし……

「……なんであいつは朝だけ遅いんだ？」

そう。千夏は朝の登校前のだけ遅れてくる。自分が指定した時刻にも関わらずだ。一月ほど一緒に登校していても春都には不思議でない。

五分ほど待っただろうか。春都の待ち人はゆっくりと玄関の扉から出てきた。

腰まで伸びた艶やかな黒髪は光沢を放ち、その整った顔立ちは見る者を魅了する。大人っぽい容姿と相まって顔に浮かぶ冷たい表情は氷を連想させる——そんな少女がそこにいた。

「おはよう。」

「……………」

春都の挨拶にまったく反応を示さずに黒髪の少女——千夏は春都の横を通り過ぎる。春都はそんな様子を気にも留めずに千夏のあとに付いて歩く。

「……………」

「……………ふむ。」

「……………」

「今日も会話はないうたな。」

春都と千夏の登校中に会話に発展したことはいまだない。

春都自身、自分が無口な人間だと思っっているがまったく話さないというわけでもなく親しい人間とならそれなりに話す。

しかし、千夏という少女が話すことはほとんどない。いや、まったくないと言っても過言ではないだろう。なんせ、春都が千夏の話しているのを見たのは三回ほどだからだ。

最初に出会った時に話した一回と教師との会話が一回、そして現在の保護者である星野家の父親——星野正志氏ただしとの会話の一回だけである。

「たまには話したらどうだ？」

「……………」

「俺も話すのは苦手だが、お前ほどではない。」

「……………」

「幸いにもお前は美人だ。少し笑顔を見せれば友達だって——。」

春都のそんな言葉は千夏にさえぎられる。

「ねえ、いつまでこんな茶番を続けるつもり？」

「茶番？」

千夏は春都を振り向くことなく言った。

「いい加減人間の振りをするのはやめてくれる？わたしはね、あなたみたいな人間をやめた人が死ぬほど嫌いなのだ。」

「……………」

「分かったらもう必要以上話しかけてこないで。」

「……………ふう。」

春都のため息には何かを諦めたような哀しさがあった。

「……………」

「……………」

お互いに無言。春都も無理に話題を提供することをやめた。元来、会話は苦手なのだ。気の利いた話が出来るはずもない。

『そう言えば、こいつの声を聞いたのはこれで四回目だな。』

そんなどうでもいいことを考えながら、春都は千夏のあとを付いていった。

いつもよりもさらに居心地の悪い空気のなか、春都と千夏は学校に着いた。八時五分という早めの時間のためか校門の前にいる生徒の数は少ない。

人との接触や関わりを極端に嫌う千夏は人の少ない時間帯に登校することを好む。

校門の前を通り学校の敷地内に入った途端、千夏の歩みは早くなる。クラスも学年も春都とは同じだが、いっしょにクラスまでは行

かない。

「よっ、おはようさん、春都。」

自分を置いていった薄情者の美少女の背中を見送る春都は、聞き慣れた声を聞き後ろを振り返った。

「ああ、おはよう。昇。」

「また、置いていかれたのかよ。ハハッ！相変わらず星野さんは冷たいねえ。」

亜網 昇は春都のクラスメイトで、性格は春都とは真逆、明るい・よく喋る・ノリ命の三拍子そろった男だ。

短く切りそろえられた髪と優しい顔立ちは、黙っていれば爽やか系のイケメンに見えないこともない。尤も本人の性格のせいでお調子者のムードメーカーという立場にいるが。

「ああ、星野さんは冷たいな。」

「お前も似たようなもんだけどな。」

「何を言っているんだお前は？俺はあんなに無表情で無口ではない。」

「……………」

「……………」

「……まあ、冗談はさておき。早く教室行こうぜ。」

そう言って歩き出す昇。

「おい、冗談ではないぞ……仕方ない、この話は後でじっくり話そう。」

「たいして話すことなんかないけどな。」

ハハハ——そう言って笑った昇は校舎に向かって歩き出した。

第三話（前書き）

誤字・脱字があればご指摘お願いします。

第三話

第三話

教室に入った春都は真っ直ぐに自分の席に向かう。自慢じゃないが春都には友人と呼べる人間が昇以外にはいない。昇に関しても友人というのは間違っているかもしれないが……。

その昇は教室に入った途端にクラスメイトに囲まれていた。やはり、どこまでも春都とは正反対だ。

「……しかし、情報のためとはいえよくやるな。あいつも。」

昇は校内でも屈指の情報量を持つ男だ。

別に情報屋なんていう胡散臭い立場のある人間ではないが、多くの人間と話す昇には自然と情報が集まる。尤も本人の職業病ともいえるが。

ただ一人の友人を観察することに飽きたのか、春都は千夏の姿を探す。

「……いた。」

俺の席は窓側から三番目の列の最後尾だから左側に。窓際の最後列に美少女が。いや、笑っていればさぞかしモテたかもしれないがあの表情では無理だ。

美少女が頬杖を付きながら窓の外を見る様子は絵になっているが、千夏を取り巻く空気はとことん重い。いじめられているわけでも無視されているわけでもない。ただ、千夏自身が重くしているだけだ。

「なにがそんなに不満なんだろうな。」

「春都君がいつまでたっても煮え切らない態度だからじゃないのかな。」

「……アホが。」

春都の後ろには、いつ抜け出てきたのか昇がいた。

「話は終わったのか？」

「うん。というか、気づかれない（……）ように抜けてきた。」

そう言っ昇の指差す方向を見ると、先ほどまで昇と話していたグループが何事もなかったかのように談笑していた。ついさっきまで話の中心にいた昇が抜けているのにそこに気づいていない（……）。

「……相変わらずだな。お前は。」

「どうだ、すごいだろう？」

「……そうだな。」

それと——と昇が続ける。

「お前はもう少しコミュニケーション能力を上げろよ。話し相手が俺じゃないのって……さすがにどうかと思うぞ？」

「気にするな。俺は現状に満足している。」

「いや、そのセリフは全然かつこよくないからね？なにちよつとドヤ顔しちやってるの、君？」

「別にドヤ顔などは……というより昇。うるさいから黙れ。」

「な、なんだよ！お前が一人で寂しいだろうと思ってきてやったのに。」

「誰も寂しいなんて思っていないし。そして、どんなに寂しくてもお前だけは呼ばん。」

「……ひどい。」

「気持ち悪いから両手を胸の前に組んでクネクネするのはやめろ。吐き気がする。」

「そこまで言っつなよな。……あ、そろそろ授業も始まるし席戻るわ。」

「ああ。早く行ってくれ。」

「『早く』は余計だろうが。」

昇は苦笑しながら自分の席に戻っていく。昇が席に戻るのを見ながら、春都は呟く。

「……願わくばこの平穏がいつまでも……というのは欲張りすぎだな。」

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

教室に響くのはカリカリというシャーペンの音のみ。時々、カチカチという芯を出す音もするが教室を支配するのは静寂。

「……つまらんな。『にぎにぎ』。」

黒板の前では初老のハゲ——ではなく男性教師が数字を書き連ね

ている。

「数学なんていうものがどれだけ役に立つんだろっな。『にぎにぎ』」

春都は隣の隣の少女を見る。

「真面目だな。俺には真似出来ん。『にぎにぎ』。」

千夏は真面目に授業を受けていた。春都の角度からノートの内容までは見えないが、色付けされたカラフルなノートでないだろう。

「——い、おい、春都。」

千夏と春都に挟まれる形で座っていた昇が春都に小声で話しかけてくる。

「ん？なんだ？」

「さつきからなに『にぎにぎ』してんだよ？」

「何って……『特注にぎにぎマシン』だが？」

「『特注にぎにぎマシン』って……。」

春都の握っているのは、俗に言う『ハンドグリップ』というやつである。

「それ、どう見てもハンドグリップだろ……。」

「いや、『特注にぎにぎマシン』だ。」

「……お前って意外とボケるよな。」

「何を言ってるんだ、昇。お前の方が何倍もボケているだろうが。」
「お前以外の人間にはな。」

呆れたように言う昇。

「ちなみにこれは百キロ用だ。」

「……………」

春都がさりげなくともないことを口にする。話している間も『にぎにぎ』し続ける友人に本気の哀れみの視線を送る昇。

「……………勉強しろよ。」

「俺には難しすぎる。」

「……………」

「その証拠にさっきからあのハゲの言ってることが全く理解できん。」

そう言っ指差す春都の先にいたのは初老の男性教師。

「まあ、仕事の関係上仕方がないとは思うが……………さすがに馬鹿すぎないか？」

「悪かったな。師匠も一般常識とかそういうのは教えてくれなかったんだよ。そんなことよりもお前が勉強できることの方が俺は疑問だ。」

「俺の場合はお前と反対に頭が良くなkachやいけなかったんだよ。」

なるほど——と同意する春都。

「おしゃべりはこのくらいにして俺は真面目に授業を受けるとするわ。」

「ああ、俺も出来るだけ聞いておく。」

「出来るだけって……………」

昇のつぶやきを無視して春都は黒板に意識を向けた。

平和で当たり前な授業風景——そこに潜む変化に春都はまだまだ気づいていなかった……。

第四話（前書き）

誤字・脱字があればご指摘お願いします。

第四話

第四話

side 優鬼 phase 1

依頼を受けてから一月が経つ。殺害対象の周囲に九龍グループ専属の殺し屋がいること以外には異常は見られない。

どうも九龍のトップには俺が依頼を受けたことが知られているらしい。

じゃなきゃ、九番目の盾なんていう大物が対象の護衛をするわけがない。

扱いにくいことが難点という話だったが、さすがは九龍といったところか。

どちらにせよ、俺が優鬼であることが知らなければ問題はならないな。

しかし……

そうになると、あの女——九龍 千夏の願いが厄介だ。

まさか

自分の父親の殺害

が、願いとは……。

肉親の殺害を願いにする人間は多くいたが、今回の願いの難易度は今までの願いの中でも異常と言えるほどに高い。

なんせ相手は今、最も日本に影響力をもつ大企業の社長だ。

昔はどうだったか知らないが、現在の日本では俺達殺し屋は非法とはいえ職として成り立っている節がある。

つまりは大規模に俺達殺し屋を雇う所があるということだ。

殺し屋を必要としていて金も持っている所——すなわち企業。

文字通り、殺らなきゃ殺られるという時代の中で生き残っていくためには優秀な殺し屋を所有する必要があった。

もちろんすべての企業が殺し屋を所有しているわけではない。

中・小企業などの小規模なところは殺し屋の存在すら認知していない。

殺し屋を所有している企業は現在十社ほどある。

いわゆる大企業と呼ばれるところだ。

他にも企業ではないが、殺し屋を所有する団体が一つだけあるらしいが。

その中でも一・二を争うほどに力を持つのが九龍グループ。

所有する殺し屋の数は百四十八名。

これは企業が持つ殺し屋の数としては最多だ。

常識的に考えてこのグループのトップを殺すことは不可能に近い。

だが、それが殺害対象ターゲットの願いならば叶えないわけにはいかない。

俺は『不可能に近い』と言ったが『不可能』とは言っていない。

『殺害対象を殺さない』とか『死んだものを生き返らせる』といったことは俺にはできない。

俺は俺自身に出来ることならばどんな願いも拒まない。

それが俺が優鬼と名乗り始めてからの誓いだ。

ん？そろそろ時間のようだな。

——依頼に従事するでしょうか。

第五話（前書き）

誤字・脱字があればご指摘お願いします。

第五話

第五話

「やっと終わったか。」

六時限目の終了を告げる鐘が鳴る。

春都にとっては地獄からの開放を意味する美しい音色だ。

「いや、今日もめんどくさい一日だったぜ。」

「まいった。」

「そついやお前……まさか、ずっとハンドグリップを握ってたのか？」

「そつだが？」

「……………」

なんともいえない微妙な表情を浮かべる昇。

「さて、帰るか。」

「え？もう帰るのか？」

まだほとんどの生徒が教室に残る中で席を立つ春都。昇の問いに対して春都は左を指差す。指差すほうを昇が向くと、そこには通学用かばんに黙々と教科書を詰める千夏の姿があった。

「……………なるほどね。」

「そついうことだから、俺は帰らせてもらっ。」

「了解。んじゃな。」

手を振る昇に左手を軽く上げて応じる春都。それと同時に千夏が後ろのドアから教室を出る。その後をゆっくりとついていく。

昇降口を出てからも春都は二、三メートルの間隔をとって千夏について歩いていった。周囲から見ればいっしょに帰っているようには見えないギリギリの距離、といったところか。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

朝と同じように無言の中を二人分の足音だけが聞こえる。千夏は背筋を伸ばした状態で一定の歩幅を維持しながら歩く。その姿勢は彼女の生き様を表しているようでもあった。

（あんなに肩肘を張って生きていて疲れないんだろうか？）

春都はそんな千夏の後姿を見ながら思う。春都にはそんな千夏の様子が誰かに似ているような気がしてならなかった。

他人を拒絶し、己を隔絶する。周囲の人間すべてを敵として認識するような瞳。誰にも心を開かず、孤高であることを望む。そんな様子が。

（……………そうか。あいつは昔の俺に似ているんだな。）

そう思うと春都は千夏にたいして妙な親近感を抱いていた。

「……おっと、距離が開いてしまったな。」

春都が思考から意識を戻すと、千夏との距離は五メートルほどになつていた。少し歩幅を大きくして合わせる春都。

（ん？なんだあの子供達は？）

千夏との間隔が元の距離になると同時に前方の様子が視界に入ってきた。

（あれは小学生か？）

千夏の十メートルほど前方に小学生と思われる集団がいた。集団の真ん中には不自然に開いた空間があり、誰かを囲んでいるのは明白だった。

（十中八九いじめだな。まったく、いつの時代もなくならん厄介なものだ。）

心の中で嘆息する春都。頭の中でどうするか考えていると千夏がその集団の目の前で止まった。もしも、近くに人がいたならば『小学生のいじめをやめさせる少女』に見えていただろう。……少なくとも今このときまでは。

「邪魔よ。どきなさい。」

開口一番、千夏はそう言った。『止めなさい』ではなく、『どきなさい』と。普通の女子高生が言ったならば反抗されていただろう。しかし、相手が千夏では反抗は不可能だ。なぜなら……

「ひっ！」

おおよそ日常で聞くことのない脅えの声が千夏の正面にいた少年から聞こえる。

いじめを前にしても変わることはない表情。虫けらを見るような目で少年を見据える瞳。

千夏には少年たちに対する関心がなかった。

千夏の言葉はただ目の前で道を塞ぐ『障害物』をどかすために放たれたに過ぎない。いじめを止めさせるつもりも咎めるつもりもない。ただ、自分も目の前にある『障害物』がなくなればいいだけなのだ。

(……こいつは本当に一般市民なのだろうか。)

本気でそう思う春都。

そうこうしている間に十数人の少年達が春都達——否、千夏から逃げていく。あとに残ったのは、顔や腕や足に青あざを大量につくった少年だけだった。

「おい、大丈夫か？」

春都が訪ねる。いじめを止めさせた……というか、『障害物』をどかした千夏はすでに歩みを再開させていた。

(……放置か。優しさというものが足りんようだあの娘には。)

自分も同じ年齢のくせにそんなことを考える春都。

「……ッ……うう……なんでなんだよ……。」

少年は泣いていた。砂と泥と自分の血で汚した顔を、涙と鼻水がさらにぐしゃぐしゃにする。

「泣くな。男だろうお前は。」

そんな月並みなことしか言えない。しかし、少年は春都の言葉など届いていないようだった。

「……………なんで僕はつかりがこんな目に遭わなくちゃいけないんだ。」

少年は誰に言うでもなく呟く。

そのつぶやきに千夏が歩みを止める。

「僕はなんにもしてないのに……………あいつらが悪いのに……………なんで僕がこんな目に……………」

千夏が春都和少年の下にやってくる。その表情はさっきまでの無関心なものとは違い、侮蔑と怒りという感情の籠もっているようだった。

「教えてあげましょうか。」

「……………え?……………」

少年は泣くのを止めて千夏を見上げる。さっき自分を助けてくれた?少女。それが今目の前に立ち、少年に言葉を投げかける。少年の表情は困惑と戸惑いの色を帯びていた。

「『あなたがいじめられて、理不尽な暴力を受けて、泣く理由を教

えてあげましょうか?』と言っているのよ。」

「……理由?」

「そうよ。理由。」

「……分かるの?」

「ええ、分かるわ。」

少年の瞳に困惑以外の感情が籠もる。

「簡単に言つとね……あなたが弱いのがいけないのよ。」

「……え?」

「うん?」

千夏の言葉に少年、春都の順で首を傾げる。千夏が続ける。

「全部あなたが悪いのよ。殴られるのも蹴られるのもいじめられるのも誰も助けてくれないのも……弱いあなたが悪いの。ただ、助けがくるのを待つだけで自分では何もしない。悪いのは自分ではなく他人だと言い聞かせ、自己を正当化する。最低のことよ。」

他人に傷つけられたくないなら強くなればいいの。力を持てばいいの。お金、人脈、知力、腕力、権力……なんでもいいから力をつければいいの。待つだけでは何も変わらないわ……。」

千夏の言葉は力強く同時に冷たい。

「ただただ恨み言を言うだけでは何も変えられないのよ……。」

春都にはそう言って再び歩き出した千夏の背中がとても悲しげに見えた。

(ひょっとしたらこいつは自分のことを言ってるのか?)

千夏が少年に語ったことは決して正しいことではない。だが、真つ向から否定されるほど間違った意見でもなかった。千夏が語る内容には妙に実感が籠もっていた。

「立てるか？」

春都が少年に聞く。千夏はもう歩き出している。

「う、うん。」

改めて見ると少年は春都が思っていたよりも背丈が大きかった。百四十センチは越えているだろう。おそらく小学校の中学年くらいの年齢。

少年は千夏の背中を見たまま固まっていた。話の半分も理解していなかっただろう。しかし、少年以上に苦しむ人間がいて、少年がいまのままではいけないと思うほどには千夏の言葉は届いたようだった。

「……おにいさんはあの人が言ってたことが分かる？」

「いや、なんとなくしか分からなかった。」

春都は正直に答えた。実際、千夏の主観的な意見が多すぎて万人に通用する意見ではなかったから当然ともいえる。

「ぼくも分からなかったよ。」

「そうか。」

少年はそう言つと服についた砂を払つて春都の方を向いた。

「おにいさん。あの人の名前を覚えてくれる？」

「ああ、別に構わんが。」

そう言つと、春都は少年に千夏の名を教えてやる。

「ありがとう。」

千夏の言葉で少年が救われたわけではない。少年に対する嫌がらせやいじめはまだ続くだろう。

ただ、少年の心には何か変化があつたようだ。その変化が良い方に転がるか悪い方に転がるかは分からない。しかし、何もせず自分の境遇を悲観するようなことはなくなるだろう、と春都は思った。

（気づかせた本人はまだ変わっていないというのにな……。）

少年と別れ、春都は変わらない少女の後を追うために歩みを速くした。

第五話（後書き）

千夏の言ってることは少し暴論過ぎましたね。

反省中です……

第六話（前書き）

誤字・脱字があればご指摘お願いします。

第六話

第六話

殺し屋——報酬をもらい、人を殺すことで生計をたてる人々の総称。

春都が暮らすここ日本でも日々増えていく非合法の存在である。

深夜一時——人々も寝静まった頃、住宅街から離れた場所にある廃ビルの前で春都は一人佇んでいた。

そんなことをしている理由を説明するには、少し時間をさかのぼらなければいけない——

「~~~~~」

いつもの如く、千夏を家まで送り届け仕事道具の手入れをしていると携帯が鳴った。

画面には『亜網 昇』の文字。どうやら、昇からのメールらしい。

「この時間にメールなんて珍しいな。」

開けてみると、中身は一文だけ。

『今夜十一時に町外れの廃ビルに来てくれ。』

この素っ気ない文面からおそらくは仕事の話だろう。

春都は夜に備えて眠ることにした。

……夜中に密談といえばカッコいい響きだが、ちゃんと寝とかな
いと次の日が辛いのだ。

傍目には静かに佇んでいるように見えていたが、実際は寒さを堪
えていただけの春都が口を開く。

「……来たか。」

「悪いな。遅くなっちゃった。」

後ろを振り返るとぺこぺこ頭を下げる友人の姿があつた。

「気にするな。それよりも昇。話とは？」

昇は居住まいを正して口を開く。

「ちつと、お前に伝えときたいことがあつてな。」

「それは分かっている。じゃなきゃ、こんなところに俺を呼ばんだ
ろう。」

「まあな——で、本題なんだが。」

「ああ。」

「千夏さんを狙ってる殺し屋が『優鬼』っていう話は前にもしたよ
な？」

「したな。通称『世界一優しい殺し屋』。殺し屋としての技術はも
しろんのこと、単純な戦闘力もかなり高い。業界でもトップクラス
の殺し屋だ。」

春都の言葉に昇は頷く。

「——しかし、殺害対象ターゲットを殺す際に願いを叶えるというおかしな行動からその名で呼ばれていて、同業者には好かれていない。話によると千夏さんとも接触したようだ。千夏さんが優鬼に言った願いは——」

そこで昇は話を一旦切って、

「『九龍 清治の殺害』——つまり、あの大企業のトップにして自分の父親の殺害を依頼したわけだ。当然、あの優鬼でもためらうような内容だわな。」

「……………」

「これが理由かは分からないが、現時点で優鬼に動きは見られない。」

「そうか……………」

昇の話を聞きながら周囲の気配を探る。

春都に感知できたのは十三人。予想よりも多いが、春都の目論見どおりちゃんという。

「んで、ここからは今の進行中の依頼とは関係ないんだが。」

「どうした？ なにか気になることでもあるのか？」

「ああ。ここ最近、どうも変な噂が流れていてな。」

「噂？」

情報売りしている昇が言うセリフにしては妙だった。

「最近、この辺りで妙な奴が出没するらしい。なんでも『殺人鬼を狩る殺人鬼』と呼ばれているみたいなんだが……………」

「……信じたのか？」

「俺だって最初は『妙な噂だな』って思っただけだったさ。でも、調べてみたら面白いことが分かったんだよ。」

「……その、『殺人鬼を狩る殺人鬼』が出始めた時期からこの町での死者が増えている——それも、殺し屋のな。」

「……………」

「それだけ聞くと、俺達に都合がいいようにも思える。」

そう。今の春都達は千夏という護衛対象を護るのが目的だ。その依頼を達成するにあたって、この『殺人鬼を狩る殺人鬼』の存在はともありがたいものだった。なんせ、こちらが何もしなくても敵となる殺し屋を殺してくれるんだから。

「だが、一つ問題がある。」

昇が話を続ける。

「その殺人鬼——『殺人鬼を狩る殺人鬼』の目的が千夏さんってことだ。」

「それは厄介だな。」

「いやいやいや、もう少し慌てろよ！相手は殺し屋殺しの出来る腕をもった殺人鬼だぜ！？」

春都が予想外に冷静なのを見て、逆に昇が焦る。

「慌てたところで俺達のやることは変わらない。ただ、護衛対象を護るだけだ。」

「……クツ！珍しく春都がかっこいい！」

「……いちいちうるさいな。昇も気づいてんだろ？千夏の周りには俺達以外の護衛専門殺し屋がいる。そうそうやられないさ。」

それに――と春都が続ける。

「その『殺人鬼を狩る殺人鬼』が千夏を狙っているなんて、どこから仕入れた情報だ？」

春都は先ほどの話では出なかったことを聞いた。

「あ、ああ……。どうも、その殺人鬼に助けられた人間がそう言っていたらしい。」

腰まで届く長い髪を束ねた男が血に濡れたナイフを持ちながら『ヒヤハハハハハ！……九龍！九龍の娘はどこだっ！……！ヒヤハハハハハハハハ！……！絶対許さないいいいいいいいい！……！フウウウウウウウウ……』とか言っていたらしい。」

「……それって本当のことか？」

殺人鬼の真似をする昇に若干引きながらも春都は聞く。話を聞くと分にはその殺人鬼は相当に狂っているらしい。本音を言えば春都としても戦いたくない相手だ。

「間違いないな。なんだったら話を聞きにいくか？今は九龍のところで預かっているらしいから、行けないこともないぜ。」

「いや、やめておこう。」

「なんでだ？」

「俺達の依頼主は九龍じゃない。もし、行くとしたら依頼主に許可を得る必要があるそうだ。……それに九龍が敵ではないとは限らない。」

十三の気配がほんの少し揺らいだ。

「とにかく、今は千夏の護衛だけを考えていればいい。」

「分かったよ。でも、俺はもう少しその殺人鬼を調べるぜ。」

「ああ、任せる。」

昇には「任せる」と言っただが、春都にはあることが気に掛かって
いた。

「なあ、昇。」

「あん？なに？」

「その殺人鬼の髪の色は分からなかったのか？」

「ああ。目撃者の証言じゃあ夜だったせいで見えなかったらしい。」

「……そうか。」

「？髪の色がどうかしたのか。」

「いや、気になったただけだ。」

そう昇に言うが、春都は落ち着かない気分を味わっていた。

（もしも、奴だったら……少し厄介だな。）

そんな春都の様子を察したのか、昇は明るく言う。

「大丈夫だって！俺達に勝てる人間なんてそうそういるわけないだ
ろ。」

「ああ。」

春都の言葉を最後に二人は夜の街に消えていく。それと同時に十
三の気配もいつのまにか消えていた。——いや、正確には十二の気
配が春都たちを追って消えた。

「ヒヤハハハハハッハハハハハハハハハハ！！！！！」

誰もいなくなつた廃ビルに笑い声が響く。

「ヒヤハハ。……殺してやるよ。お前の大事な者を……九龍 清
治iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!」

——暗闇の中、狂った男の叫びが響く。その叫びを聞く者はいない。……『世界一優しい殺し屋』を除いては。

第七話（前書き）

誤字・脱字があればお教えください

第七話

第七話

s i d e 優鬼 p h a s e 2

俺は廃ビルから五百メートル程離れたところで『殺人鬼を狩る殺人鬼』と呼ばれる男を観察していた。

理由は簡単。

この辺りで最近暴れまわっている『殺人鬼を狩る殺人鬼』という奴に興味を持ったからだ。

少しばかり遠いが仕方ない。

男に気づかれるよりは幾分かマシだろう。

しかし……あの男の頭は大丈夫なのか？

そう思わずにはいられない。

廃ビルの近くで奇声を上げ、ナイフを振り回す様子はどう考えてもおかしい。

人を平気で殺す俺の神経も大概だが、奴はもっとおかしい。

狂ってるとしか言いようがない。

だが、今はそんなことを気にしている場合ではないな。

奴の髪の色――

赤。

燃えるような赤色だった。

本来、そんな色の髪を持つ人間が生まれることはない。

……少なくとも俺の知っている世間の常識では。

だが、男の髪は赤かった。

それは、男がただの人間ではないことを示している。

狂化人間――正式名称は心肺機能特化型筋力増強人間。

どこかの企業が殺し屋を殺すために開発した存在。

いわゆる人造人間ってやつだ。

名前にもある通り心肺機能と筋力が強化された人間で、常人を凌駕する身体能力を持つのが特徴だ。

しかし、その代償に精神に多大な負荷を掛ける為、情緒不安定な部分が目立つ。

結局、この精神構造の問題が最後まで解決しなかったことが理由で開発中の人造人間が暴走。

企業の施設は倒壊。

そこに勤めていた職員やその家族が大勢亡くなった。

開発は中止され、現在では生産されていないはずだ。

俺の予想ではあの男は狂化人間だ。

そういう意味ではかなり困ったことになる。

狂化人間は人を殺すことに特化している。

なんせ人間の中でも異常な身体能力と殺人技能を持つ殺し屋を殺すために生み出されたのだからな。

もし、あの男が俺の殺害対象ターゲットを殺そうするならば一瞬で殺られるだろう。

つまり、こうして観察しているのは興味半分、警戒半分といったところか。

今のところ俺に殺害対象ターゲットを殺すつもりはない。

『願いを叶えていない』

というのも理由の一つだが……どうにもあの少女が気になる。

……いつまで気にしていても始まらない。

あの男が殺害対象ターゲットに危害を加えるのであれば俺が殺そう。

——俺が願いを叶えるまでは誰にも殺させるつもりはないからな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5960x/>

『世界一優しい殺し屋』と『踊る世界』

2011年11月16日18時11分発行